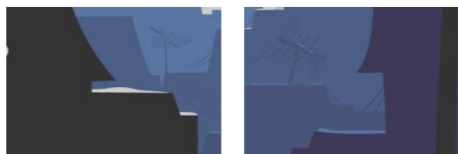


# コトブキ



Subterranean Sisterhood.



**!注意!**

この作品には  
性的な補綴百合  
ちゅっちゅ成分が  
含まれています

**For Adult Only**

わかったわ、お姉ちゃん！

*"I have understood the answer of the play riddles!"*

起き上がって、おなかをくっつけて、

*"Only have to get up, to join the stomach,*

抱き合えばいいのよ！

*and to embrace each other!"*

— [open] → [close] —

旧都の喧噪も遠い、地の底の底。雪の明かりが空けるステンドグラスの色彩の中、ランプの芯が小さな音を立てる。

食後の紅茶を口へと運び、私は食器と一緒に切り分けたミートパイの残りを片付ける燐を呼び止める。

「ねえ、お燐」

「なんですか、さとり様？」

似合わないエプロン姿の燐は、屍<sup>シレミア</sup>妖精に配膳台を運ばせながら、ぴこぴこと猫の耳を揺らして振り返る。

「こいしはまだ帰ってこないの？」

「そうですね。一応、お食事は用意してるんですけど」

前はいつだったかな、と呟きながら、顎に指を当てる燐。半ば予想できていた答えとは言え、眉間に皺が寄るのを押さえる事は出来なかった。

「……そう」

「そんなに心配なさらなくても大丈夫だと思いますけどねえ、あたいは」

「それでも、よ」

込み上げてくる疲れた感情を、紅茶の香りと共に喉に流し込んで、吐息。

怨霊騒動に端を発した一連の異変以来、地底と地上の間には緊張緩和が進行中だ。鬼や天狗、一部の人間を中心に少しずつ交流も始まっているが、だからと言ってかつての確執までもが消えてなくなるわけではない。忌み嫌われ地の底へと追いやられた妖怪達の恨みは深く、彼らが疎まれた事実もまた一朝一夕に薄れるものではない。

「それに、あの子は特別なもの」

心の読めない<sup>サトリ</sup>覚。それが妹、古明地こいしだ。他者の心を読む第三の眼を閉ざしたこいしは、同時に無意識を操る心を手に入れた。意識の外に身を置き、既知の外に在る妹の行動は、もはや誰にも予測不能だ。

私にも、そして恐らくこいし自身にすらも。

だからこそ、姉としてはなにかとんでもないことをしでかしているのではないかと気が気ではない。

(……心配性だなあ、ですか)

わずかに苦笑する、燐の思考に交じる感情は呆れ二割、微笑ましが八割。

地霊殿に棲みつくペット達は、少なくとも私に対して表裏がない。知恵を付け、人型を取れるようになった者たちは隠し事ぐらいはするものの、それも大抵は些細なことだ。

けれど——心を読む事の出来ない妹は、どうにも距離を掴みかねる相手だった。

文字通りの神出鬼没。その気にならなければ、こいしは誰にも気付かずに、どこにだって行く事ができる。最近気付いたことではあるが、どうもこいしはこの能力を使って、以前から地上へ行き来していたらしい。仮に公になると非常に厄介なことであるので、私も見て見ぬふりをしているが。

地上との交流が始まってから、こいしの放浪癖はさらに悪化し、いまや姿を見る時の方が珍しい。時折、脈絡なくふらりと帰ってきては、用意してある食事を勝手に食べてまたどこかへ行ってしまふ。

「……あれじゃペットと同じよ」

いや、その意図が分かるだけ動物の方がまだましだ。主人に對して無関心であつたとしても、私はそれを知ることができる。

だが、同じ<sup>サリ</sup>覚として、自分に最も近いはずの妹が、今は一番遠くに居る。

聞けば、妹は地上を出歩いて、そこいらの家にあがりこんだり、好き勝手に食事を物色したりして過ごしているらしい。無意識を操るゆえに誰にも気付かれぬまま、ふらふらと。

（悪いことになっていなければいいんだけど）

心配症と言われても、不安な心は打ち消せない。覚<sup>サリ</sup>にとつて相手の心が分からないなどというのはあり得ないのだ。こい

しは今まさにその異常の最中に在る。

<sup>シニ</sup>匣<sup>ディ</sup>内<sup>イ</sup>猫<sup>キヤ</sup>や非<sup>ヘ</sup>黒<sup>ベ</sup>鴉<sup>レイグ</sup>であれば観察することもできるだろうが、その实在すら不確定な妹は、一体どこで何をしているのだろうか。

地上には吸血鬼や死を操る亡霊、魔女に天狗、脅威となりうる妖怪がいくらでもいる。誰かに騙されていたりしないだろうか。人間達だって油断はできない。地底に乗り込んだきた巫女たちは例外としても、最近の人間たちは妖怪を必要には恐れなくなっているとも聞く。

「あの子、無意識でなんでも判子押ししたり保証人になっちゃったりするから」

胸を塞ぐ不安が、溜息になって形を作る。

「そんな事はないと思いますけどねえ」

お隣の思考は『大事に思ってるのかどうか微妙なコメントだなあ』と『でもやっぱり、妹思いなんだよなあ、さとり様』と苦笑を交えたもの。

「……地上はそんなに悪いところじゃない、ですか。……あの巫女を恐れない貴方はそうなのかもしれないわね」

てへ、と隣は舌を出す。

だが、それも一部に限った事だ。妖怪に真つ向相對してくれる者が多いわけがない。私はそれを嫌というほど知っていた。カップの底に残る苦い味を舐め、胸の奥に澱む不安を噛み締

める。なにしろこいしは相手の心が読めないのだ。不埒な事を考えてやってくる相手にも気付けないかもしれない。

覚<sup>サトル</sup>というのは外から思われているほど精強な存在ではない。交渉であれ戦闘であれ、相手の心を読めるという絶対的なアドバンテージの上で、主導権を握れるに過ぎないのだ。私が鬼やその他の多くの妖怪達を差し置いて、地底の管理を任されているのもそこに一因がある。

そこいらの雑魚妖怪ならともかくも、その存在を知り、手慣れた相手であればこいしを陥れることは、決して難しくはないだろう。

「……珈琲をお願い。濃い目で、砂糖は要らないわ」

「了解です」

私は隣にそう命じて、胸の中の不安を払うように、机の上に積み上げた書類に目を戻した。

——【close】→【open】——

「うーん、べちゃべちゃして気持ち悪い……」

突然の雨だった。風穴に飛び込むまでに結構降られてしまい、帽子と後ろ髪が水を吸って肌に張り付く。急な天候の変化とい

うのは、地底にはない事だから未だに馴染まない。

モザイク床にぼたぼた雫を垂らしながら、スカートの裾を絞り、ずぶ濡れの靴を後ろ指にひっかけて、靴下でべたべたと床を歩く。

見上げた大時計の針は、もう随分前に日付を跨いでいた。すっかり灯りの落ちた地霊殿の中は静まり返っていて、私の足音ひとつくらいは闇の中に飲まれてしまいそう。

もつとも、別に目の前で誰かが起きていたって、気付かれずにいるのは簡単なだけだ。

「……お姉ちゃん？」

と、いうのに、リビングにはまだ明かりがついていた。テーブルの上には、冷めた珈琲が半分ほど残ったカップ。自分の椅子に片肘をついて、お姉ちゃんはどうとうと傾く頭を振り、眠気を堪えている様子だった。

（……眠いんなら、お部屋に戻ればいいのに）

ペット達には規則正しい生活を言い付けているくせに、たまに帰ってくれば、お姉ちゃんはいつもこんな風に夜更かしをしている。無理する必要なんかないのに、私がそう言うとお姉ちゃんはずぐに怒るのだ。良く分からない。

「まだ起きてたんだ？」

「……こいし」

能力を切ってドアの隙間から顔を覗かせると、お姉ちゃんは

弾かれたように顔を上げる。

怒るでもない、喜ぶでもない、いつもと同じ不思議な表情に、私は思わず首を傾げた。

「どうしたの？」

「そんなに濡れて——傘くらい持って行きなさいって行つたでしょう」

「そう？」

「そう、つて……ああほら、そんなに歩きまわらないで!!」

靴が手から落ち、傾いた帽子の端から、ぽたぽたと雨雫が落ちる。お姉ちゃんは近くにあったタオル私の頭にかぶせ、ごしごしと擦りはじめようとする。

「……んむーっ……なにをするの、お姉ちゃんっ」

いきなり鬱陶しい事をされたんで、私は一度意識の外側に逃げてから、お姉ちゃんの隣に移動した。というのに、何故だかお姉ちゃんは深く溜息をついた。眉間に寄せられた皺が一層深くなる。

「そんな恰好じゃ風邪をひくでしょう」

「風邪？」

相変わらず良く分からない心配をするなあ。

「……こいし。こんな時間まで、何をしてたの」

「何をつて、色々だよ？」

答えると、お姉ちゃんは大きく首を振つてみせた。

「そうじゃないわ。どうしてこんなに遅くなるのかって聞いているの」

「えー？ 別に。なんとなく」

「なんとなくじゃないわよ。……せめて連絡くらい入れるようにしなさい」

まるで苦いものでも口に入れたように、お姉ちゃんは表情を歪めた。

「一週間も連絡もないままで——心配したのよ？」

「そうなんだ」

「『そうなんだ』——私は文字通り、思うままを口にしたただけだったのだけど、それを聞いてお姉ちゃんの顔色が変わる。

「こいし！……ねえ、お願い、ちゃんと聞いて？ あなたが散歩することにまで口出しはしたくないけど、ものには限度があるでしょう!!」

「むー……。怒ってるの？ お姉ちゃん」

「そうよ!! みんなに心配かけて、どういふつもりなの!!」  
嘘だ。

それはすぐに分かった。少なくともお空やお燐がお姉ちゃんと同じように心配するはずがない。あの子達はあくまでお姉ちゃんの従僕であって、その妹である私のことは、究極的にはどうでもいいのだ。一応、敬意こそ払っているみたいだけど、その扱いはかなり適当だ。

（——なんだろう。ざわざわする）

良く分からない苛立ちが、胸をささくれ立たせていた。お姉ちゃんと長く話していると、いつもこんな感じだ。別に不快とまではいかなくとも、何かがズレたまま噛み合ってる感じがして、キモチが悪い。

「あなたには分からないかもしれないけど、地上は危険などころなのよ。私達を嫌ってる相手だってたくさんいる。いいえ、地底に住んでいるというそれだけで、排斥される理由になるのだから——」

「お姉ちゃん」

くどくどと喋るお姉ちゃんの言葉を遮り、私は初めてまっすぐ、その顔を見た。

言葉を失っているお姉ちゃんの、紫の眼を覗き込んで言う。

「別にさ、私が何してたって、お姉ちゃんに關係ないじゃない」

「か、關係ないわけじゃないでしょうっ!! 姉妹なのよ!!」

叫ぶ声は、僅かに震えていた。

そう。これだ。いつも超然とした風を装ってはいても、けっきょくお姉ちゃんは臆病なのだ。人の心が見えるから——見過ぎてしまうから、あれこれ余計な悩みまで抱え、一人で勝手に押し潰されてしまう。

それなのに、何にも興味が無いふうを装うんだから、性質が悪いと思う。心が視えたって、いいことなんか何にもないのに。

「お燐もお空も言ってたよ? お姉ちゃん、過保護すぎるって」「つ……そ、そんな事ないわ。あの子たちはそんな事考えてないもの」

（……これだもんなあ）

目の前に居る相手の心が読めるくらいで、相手のこと全部を分かってしまった気になれる。お姉ちゃんの——覺<sup>サトル</sup>って妖怪のそういうところが、気に入らない。

そのくせ、私の言葉は信用できないのだ。その言葉の裏にある心が読めないから。

椅子の手すりを握り締め、狼<sup>う</sup>狼<sup>た</sup>えるお姉ちゃんの姿がどこか滑稽で、私は自然と、唇の端を緩めていた。

「じゃあ、お燐たちは私に嘘をついたの? なんて? そんなことする意味ないよね?」

「そ、それは……」

なおももごも口を動かすお姉ちゃん。それを見て、私は少し強めに脚を踏みならす。いつの間にか会話の主導権は私の方へと移っていた。

「もー、なんでお姉ちゃん、そんなにうるさいの?」

「……な、なにか、間違いがあつてからじゃ遅いでしょっ」  
僅かに顔を赤くして、おねえちゃんは言った。何でも読めるくせに、お姉ちゃんはこういう話題に滅法弱いのだ。明け透けに見えてしまうからこそ嫌がつて、そういう話題を極端に避け

ているからかもしれない。

「まちがい？」

さも、なんにも分かってませんよー、とばかりの無垢さで首をかしげてみせる。ちよつと声も可愛らしくしてみたり。

名づけて「あかちゃんはどこからくるのー？」攻撃。面倒くさい保護者<sup>オトナ</sup>を煙に巻くのは一番いい方法だ。

「そ、その……わ、悪い人に、……いたずら、されたりとか」  
たったそれだけのことを口にするだけで、お姉ちゃんは真つ赤になつていた。

他人のプライバシーなんか無関係な能力のくせに、こういうところがやけに純情なのはどうしたもんだらうと思う。

「ふーん……」

少しからかってやるう。そう思ったのはごく自然な、無意識。

あるいは、ちよつとした意趣返しのもりだったんだらうか。  
頭の後ろで腕を組んで、なんでもないように言ってみた。

「——そんなの、もうとつくにされてるけどなあ」

瞬間。気まずそうに目をそらしていたお姉ちゃんが、弾けるように顔を上げた。いつもは眠たそうにしている目を見開いて、信じられないというように私を見る。

「う……」

はつきりと目を泳がせ、汗まで浮かべて。

しばしの躊躇の後、お姉ちゃんはわずかに唇を震わせながら、

縋るような視線を向けてきた。

「嘘、よね？」

「ホントだつてば。あのさあお姉ちゃん。私が”遊びに行く”  
つて言つてたの、まさか本当に鬼ごつことかかれんぼしに行  
つてるとか思つてたわけじゃないよね？」

「そ、んな……っ」

どうやらお姉ちゃんにはかなりの衝撃だつたらしく、まるで  
本当にがつんと頭を殴られたみたいに、お姉ちゃんはふらふら  
と椅子に倒れ込む。思つたより効いてるみたいだった。

「……………っ」

もともと血の気の薄い肌をさらに青くさせて、口元を覆つて  
ぼそぼそと何かをつぶやき始めていた。

うーん。なかなか新鮮な表情。なんでもお見通しの得意げな  
覚<sup>サトリ</sup>相手には、滅多に拝めない表情だらう。

折角のレアな状況、お姉ちゃんのそんな反応をもつと見たく  
なつて、私は更に演技をエスカレートさせてゆくことにした。

ちろ、と少しだけ出した舌先で、唇を艶めかしく舐めてみせ、  
「どうしたの？ 別にヘンな事じゃないでしょ？ 普通だよ、  
これくらい。普通」

「で、でも、そんな——お付き合いだなんて、あなたにはまだ  
……」

「うーん。お付き合いつていうかね？ そんな堅苦しいのじゃ



なくてさ、あちこちで気が向いたら、つていうだけけど？」

「あ、あちこちつて……こいし、あなた……!!」

あ、また食いついた。

……うーん。なんだろ。私、こういうことなら相手が誰でもいいとか、そんな風に思われてるのかなあ。

お姉ちゃんつてば、なんだかもうほとんど信じかけてるみたいだけど、ちよつと複雑だ。いくらなんでも私にだって選ぶ権利つてものがさあ。

まあ、今はもうちよつとお姉ちゃんを苛めてみよう。

「だ、駄目よこいし、そんな、ふしだらな……つ」

「そう？ でも、別に痛いことはされないし、いつもみんな優しくしてくれるよ？ 私も色々教えてもらったし、私がしてあげると、皆とっても気持ちよさそうなんだもん。」

最初は皆怖がつてたけど、眼、閉じてるの教えてあげたら、喜んでくれてね？ それに、私も触ってもらったり、キモチ良くしてもらえるから、えっちなことつて好きだし——」

「こいし……!!」

お姉ちゃんは突然声を荒げて、椅子を蹴飛ばすようにして立ち上がった。

さすがに少しやり過ぎただろうか。そう思っている間にも、

大腿で歩いてきたお姉ちゃんが、くつと手を振りかぶる。

叩かれる——私は思わず身構えた。

けれど、いつまでたってもほつべたにくるはずの衝撃はやってこない。おそるおそる目を開けてみれば、お姉ちゃんは手をふりかぶったまま、小さく肩を震わせていた。ひ、と喉を震わせながら、見開いた眼を僅かに濡らしている。

——泣いてる、んだろうか。

ちよつと、悪戯がすぎたかもしれない。さすがに罪悪感が込み上げてきた。

舌を出して——嘘だよ、と続けようとしたわたしは、

「ねえ、お姉ちゃんは——そういうの、したことないの？」

ふと、そんな言葉を口に出していた。

「な……つ」

「化石みたいにずーつと地底こんなちちに竈くわってるんだもんね。やつぱり経験ないの？」

（……あれ？）

勝手に口が先を続けてしまう。

何を言ってるんだろうと思っているうちに、私はお姉ちゃんの両の腕を掴んでいた。私の視線のすぐ先で、視線を足元に向けたお姉ちゃんが口くちこもる。

「そ、それは……つ」

「ねえ、私、知ってるんだよ？」

これ以上続けるつもりはないのに。なぜだか私は、お姉ちゃんの耳元で囁くのを止められない。かざりと服がこすれ合う距離で、お姉ちゃんが動揺してるのが良く分かった。

「お姉ちゃんってさ。よく能力使って、他の妖怪(ト)のそういう、いやらしい想像とか覗いてるよね？」

「っ……………!!」

はつきりと息を飲む気配。

まさかと思ったけど図星だったっぽい。適当に言ってみただけなのに。でもまあこれは好都合かもしれない。叱られるのも面倒だし、このまま一気に誤魔化してしまおう。

「偶然見えちゃった、っていうなら分かるけどさ。そうじゃないよね？」

くすくす。微笑みながら、下を見て固まってしまったお姉ちゃんのそばにそっと身体を近付けると、お姉ちゃんは解りやす過ぎるくらい、身体を強張らせる。

「そんな、覗きみたいに興味の悪いの、私は厭(いと)だけどなあ」

「ち……違(ちが)うわ、そんな——っ」

「お・ね・え・ちゃ・ん？ 嘘、ついちゃだめだよ？」

他人のいやらしい妄想が視える——そんなのは、覚(サ)りなら誰だってあることだ。

誰も彼も聖人君子であるわけでなし。まして地底に住んでるのは地上から排斥された妖怪たちばかり。欲望をこらえるこ

とも知らないような連中だって少なくない。頭の中を順に覗いて行けば5人に1人くらいはそんなのにぶつかる。

「っ……」

でも、当てずっぽうの私の指摘は、恐ろしいくらい当たっていたらしい。お姉ちゃんは今度こそ完全に言葉を失って、顔を赤くして俯いてしまう。

「本当に？ ねえ？」

首を振ろうとしたお姉ちゃんの肩を掴み、その眼をぐっと覗き込む。ちょうどそのまま、お姉ちゃんの心の中で覗いてやるというように。もちろん私にはそんなことは出来ないけれど、他のひとの心が読めるのが当然のお姉ちゃんには、そうとは信じられない。

同じ覚(サ)りであつた私が、今まさに、お姉ちゃんの心の中を覗いているのだと——そう思っているに違いなかった。

私の能力が封じられたままであるのを知っていても、お姉ちゃんはその疑念を捨て去ることはできないのだ。

そして、

心の中なんか見えなくても、お姉ちゃんの解りやすい反応だけで十分だった。

「ねえ？ おねえちゃん？」

私の声に、びく、とお姉ちゃんが背中を竦ませる。

いつも超然とした振る舞いを貫いているお姉ちゃんだけど、

本当はこんなに繊細で怖がりなんだ。それをもっと確かめたくて、私は先を続ける。

「いつも、みんなの心を覗いて、えっちなことしてたの？」

「そ、そんな、こと……っ」

ない、という否定の声は、とても弱々しいものだった。

椅子の上に追い詰められて逃げられなくなったお姉ちゃんの、胸元。熟したトマトみたいに赤い三番目の瞳に、ついと指先を伸ばした。

「ひあ……っ」

眼をつんと突かれて、お姉ちゃんがやたらに可愛らしい声を上げる。

「お姉ちゃん。本当の事、教えて？」

「だ、だって、そんな——」

『仕方ない？』 ふうん。仕方ない、のかなあ？ 勝手に見えちゃうんだから仕方ないって、お姉ちゃん、そんなふうに思ってるの？ そんなんで、よく私のこと怒れるよね？」

泣きだしそうになっているお姉ちゃんに意地悪く言って、私はお姉ちゃんの第三の眼の<sup>サードアイ</sup>瞼に指をひっかけて、ゆっくりと押し下げてゆく。

わたしと同じように、

ひとのこころの見えない世界へ——招くように。

お姉ちゃんの胸の上で、第三の眼窩を覆う瞼が、三日月のよ

うに細くなつてゆく。

「こ、こいし……、だめ!!」

悲鳴のような叫びと共に、ぱあん、と乾いた音が響いた。

「っ……っ」

両眼に涙をにじませ、肩を上下させるほどに息を荒げて、お姉ちゃんは私を睨む。

手が出してしまったのは、お姉ちゃんにも思わぬことだったらしい。私を振り払ったまま、お姉ちゃんは呆然としていた。

払い除けられた手をさすり、私はそつと首をかしげる。

「見えなくなるようにするのだって、簡単なのに。……どうしてそんな言い訳するの？」

「ちが……ッ、そんな、そんなこと、しないわ——私は……」

かたくなにそれを否定するお姉ちゃんが、

なんだろう、

酷く——鬱陶しかった。

だから、私は心の赴くまま。お姉ちゃんの額に顔を寄せて、意地悪に囁くのだ。

「へえ、そうなんだ？ それなのにこんなになっちゃうの？」

もう一度、お姉ちゃんの第三の眼に指を滑らせる。瞼のふちがひくひくと震え、熱く潤んでいた。その端っこにつぶ、と小さく指先を沈み込ませると、

「ひあう……っ」

熱っぽい悲鳴とともに、お姉ちゃんが身体を震わせる。

他者の心を読む眼は、外部からの刺激にとっても敏感だ。それはたとえ、私が相手だつて変わらない。

力の抜けた膝をがくと震わせ、お姉ちゃんはソファアの上に倒れこんだ。

「や、やめ……っ、あ、ふあ……」

抵抗の言葉が、途中から甘いものになる。手で口を塞いで耐えようとするお姉ちゃんの無防備な胸の眼を、弄ぶ。

私の能力を使つて、無意識の中で触れているから、何の前触れも予想もつかない。だから身構える事も出来ないし、覚悟も出来ない。全く無防備な瞬間を狙い撃ちにされているわけで、敏感なもの仕方がないだろう。

つぶ、と沈んだ指先に、お姉ちゃんはまた声を上げた。二度、三度、涙を浮かばせるお姉ちゃんの三つ目の眼を弄り回す。

そのたびにお姉ちゃんは何度も喘ぎをこぼし、椅子の上で身体を震わせた。椅子の背もたれを乗り越えるように、背中を反らす。

「うふふ。ねえ？ 違う？ お姉ちゃんっ」

「あ……っ……!!」

がくがくと背中を震わせ、白い喉を無防備にのけぞらせて、お姉ちゃんは唇を引き結ぶ。その反応を確かめながら、私はお姉ちゃんの嘘を暴きたてていった。

耐えるようにぎゅうつと目をつぶるその耳元に——ぼそりと囁く。

「ふふ、腰抜けちゃった？」

かあつ、とおねえちゃんの頬が赤くなる。

反射的にスカートの前で握りしめられる手のひらに、わけなく胸が震えた。

「……そっか。お姉ちゃんつて、自分がそういう、いやらしい想像に使われちゃうの、好きなんだ？」

「ち、ちがっ……!! 違うわ!! ……そ、そんな、わけ……ない、じゃないっ!!」

ムキになつて声を荒げるお姉ちゃんに、私は口元をくすりと緩め、

「そうかなあ？ だつたらどうして見えるままにしておくの？ 普通、嫌でしょ？ そんな妄想トに使われるのなんてさ」

言うまでもなく、地霊殿のペットの半分はオスだ。彼らだつて人型を取るようになれば、好意以上の思慕を向けることもあるだろう。ただでさえ生き辛い地底で寝床とご飯をくれる主人様だ。知恵を持つて言葉を話すようになれば、恩情に報いるようにだつてなる。

少し考えれば分かることなのだけど、お姉ちゃんはそのことを指摘する余裕すらないみたいだった。

「ペットのなら、そういうの見たつて嫌われないから？ ふふ、

それともお姉ちゃん、動物相手じゃないと興奮しないとか？  
うわあ、変態さんだねっ」

「っ、……嫌、あ……っ」

我ながらとんでもない暴論。でも、すっかり混乱の極致にあるお姉ちゃんには言い返すことも出来ないらしかった。それどころかどんどん顔を赤くしてゆくばかり。

あるいは——お姉ちゃん自身にもほんのちよつとは、後ろめたいところがあるからなのかもしれない。

これまで知らなかったお姉ちゃんの素顔。

それを暴き立ててゆくのがなんだかやけに楽しくて、私は窮地に追い込まれてゆくお姉ちゃんの上に圧し掛かる。

「こ、こいし!! お行儀が悪いわ、どきなさいっ」

「えー？ 恥ずかしいのはお姉ちゃんじゃない？ 今でキモチ良くなっちゃってるんでしょ？」

「ふあ……んっ……!!」

さわり。冗談半分で軽くふくらはぎを撫でてみると、お姉ちゃんは大きく息を詰め、身体を竦ませた。

……おお。なんか思ったよりスゴい反応。

スカートの下で、もそもそと脚を動かして、みるみる顔を赤くしていくお姉ちゃん。トイレに行きたいのでもなければ、そこからわかることはひとつだ。

「違う……ちがう、の……」

「なにが違うの？」

きょとんと聞いてやりながら、自分の膝をお姉ちゃんの脚の間に押し込んでゆく。お姉ちゃんは懸命に私を押しつけようとするけれど、地底に引き籠ってばかりの細い腕でそんな事ができるわけもない。

「こ、こいし、だめ……」

力のない拒絶が繰り返される。けれど、こんな姿で言われても、むしろ嗜虐心を逆撫でするようなものだ。

「ねえ？ お姉ちゃん、皆の頭の中で、いつもどんなふうにされてたの？ 教えて？」

「……………」

そつとお姉ちゃんの耳元に囁く。お姉ちゃんの可愛らしい顔は、みるみるうちに耳まで真っ赤になってゆく。人の心なんてみんなお見通しして態度のくせに、このあたりは本当にお子様だ。お姉ちゃんぶっているけど、私なんかよりもずつとずつと。

「やだ……こいし……意地悪、しないで……ひゃんっ!」

お姉ちゃんの目元にじわりと涙が浮かぶ。

なんだかそれがとても美味しそうで、私はぺろ、とお姉ちゃんの頬に溢れた涙を舐めていた。

ぞくり、と胸を脈打たせる、ほんのりと塩辛い味。舌先に残るその味に、私はたちまち夢中になった。

「や、だめ……そ、そんなの、舐めちゃ……っ」

「んー？ お姉ちゃんの、美味しいよ？」

二人分の体重を支え、椅子がぎしつと悲鳴を上げた。

くすぐったそうに身体を疎ませるお姉ちゃんの反応が面白く、顔じゅうをぺろと舐めてゆく。ペット達にだってこれくらいのははされているはずなのに、なんでこんなに恥ずかしがるんだろうか。

「っ、や、あ……っ、こいし、駄目、…っ、やめなさいっ」

「んふふっ」

私の舌にとろとろにされた、ほんのり赤いほっぺたに、ちゅ、とキスをして。私はそつと口元を拭う。椅子の上で震えるお姉ちゃんの姿は、いつもの威厳なんか吹き飛んで、虐めてオーラ全開の小動物。

「んー。でも、お姉ちゃんも悪いよね。そんな格好してるから、みんなお姉ちゃんでいやらしいこと考えちゃうんだよ？」

お姉ちゃんは、確かに私のお姉ちゃんであるはずなのだけど、どういうわけか私と背格好もほとんど変わらない。たまにお風呂呂に入る時に覗いてみたこともあるけれど、ぶっちゃけ私より発育がよろしくないんじゃないかと思う。

「お姉ちゃんに欲情するような人たちなんだから、きつとすぐ変態さんなんだよねえ？」

「ち、ちがう、そんな、のっ……」

逃れようとするお姉ちゃんだけど、私に前から圧し掛かられ

て、背もたれに挟まれ、どこにも逃げ場なんかない。

「やめて…、やめなさい、こいしっ。こんな、こと…っ」

「ねえ、お姉ちゃん？ じゃあさ、こういうのは？」

けけけと咳き込んでいるお姉ちゃんの、艶めかしい半開きの口の中に、指を突き入れた。

「んむ、うっ……!!」

眼を白黒させて吐き出そうとするのを押さえ込んで、お姉ちゃんの小さな口の中に、さらに一本。中指も一緒に押し込んでゆく。お姉ちゃんの口のナカは、思っていたよりもずつとところと、熱くぬかるんでいた。

「っ、んう、ぐっ」

「あ痛。……もう、お姉ちゃん、気を付けてっば」

苦しげに顔を歪めるお姉ちゃんの歯が、反射的に噛みついてくる。

といつても、お姉ちゃんの小さな口では大した痛みも感じない。ほとんど甘噛みみたいなものだ。それでも抵抗されると面倒なので、口の中で指を大きく広げて、ぐりぐりとほっぺたの内側を擦る。苦しそうに首を振るお姉ちゃん。

「ん、ふあ、っ、…えうっ……けほっ……や、め、っ」

「だーめ。ほら。これから、お姉ちゃんをキモチ良くする指だよ？ 優しくしてあげてよね？」

「……ん、っ……」

「そうそう。んふ。お姉ちゃん？ 男の人のって、これより全然おっきいんだからね？」

耳元でそう囁くと、お姉ちゃんの顎から力が抜けてゆくのがわかった。

茹だつたみたいに顔を赤くするお姉ちゃんが、たちまち大人しくなるのがちよつと面白い。私は指を揃えて、お姉ちゃんの桜色の唇の中へと出し入れする。

「ほら、もつとお口開けて？ そうやって、もつと舌も使つて……べろべろつてしてあげるの」

ぬるぬるの舌を、小さく色づいたぷくりとした唇を、揃えた指がぷちゅぷちゅと犯す。お姉ちゃんの口からこぼれる粘つく唾液の音は、なんだかもつとイケナイ場所を弄っているみたいな気もした。

「ぶあ……や、やめ、て、こいし、っ」

「だーめっ」

涙目で訴えてくるお姉ちゃんに、笑顔で囁く。いつもぼぼそと小さな声で喋るお姉ちゃんの口のナカは、まるで性器みたいに気持ち良かった。狭くて小さな頬の粘膜と、ぬるぬるの舌がぎゅぎゅと指を包んでくる。

こんなにいやらしいお口をしてるなんて、やつぱりお姉ちゃんにはえっちなのだろう。

口の中を深くえぐるように指を押し込むと、お姉ちゃんは涙

を浮かべて噎せた。良く分からないけど唾を垂らしてしまうのが嫌みたいで、じゅるつとはしたくない音を立ててまで吸り、ぎゅつと目をつぶって飲み込む。

「……ん、ちゅ、んうう、ちゅ、るるう……っ」

ぬる、と引きずり出された指から、つうつと唾液が糸を引く。お姉ちゃんは垂れ落ちるそれにも吸いついて舐めとってゆく。はあはあと息も荒く、ちゅぷりと唾液を、喉と鎖骨の上に受け止めて。お姉ちゃんは呆けたような、うっとりした表情を浮かべていた。

なんだ。

やつぱりおねえちゃんは、いやらしいんだ。

「うふふ。それじゃあそろそろ、ココも触ってあげるね」

お姉ちゃんの腕を、頭の上で交差させて押さえつけ、その間にスカートのホックをばちんと外した。

「だ、……駄目っ!!」

拒絶するように脚を閉じようとするお姉ちゃんだけど、私の能力はそれを許さない。

それに、お姉ちゃんの肉付きの薄い脚はいくら閉じようとしても、その付け根に細い隙間を開けてしまう。まるで私の指先を迎え入れるみたいに、中指がするりとお姉ちゃんの下着のすべすべした感触を撫でた。

熱のこもったそこは、すでに——くちゅ、と音を立てていた。

「っ……あ……っ」

「あは。ほら。もう恥ずかしい音、するよ？ ……お姉ちゃん、いつも独りでしてるんでしょ？ こーゆうふうには、<sup>ドロアス</sup>ほんつの上から触るの？ それともいきなり直接、指？ こっちは弄ったりする？ 孔のナカは？」

「そ、そんな……恥ずかしい、こと、言える……っ、わけ、ないっ……でしょうっ」

「へえ。一人でしてるのはホントなんだねー」

「っあ、……う……っ」

悔しそうに、口を引き結んで赤くなるお姉ちゃん。こんな簡単な誘導尋問に引つかかっちゃうのは、全然余裕がないからだろう。

くす、と笑って、私はくにくにと細い隙間に指を滑らせるように、お姉ちゃんの大事なところを擦る。布越しのもどかしい刺激でも、昂ったお姉ちゃんには十分みたいだった。

ぱんつの股布はすぐに蜜を染みさせ、色を変えてゆく。

くちゅくちゅと音を立てて、お姉ちゃんの唾液とまじりあった粘つく熱い蜜は指に絡みつき、たつぷりといやらしい蜜を吸ったお姉ちゃんの下着は、その下の『おんなのこ』のカタチまで、はつきりと見えるくらいに濡れ透けさせていた。

お姉ちゃんがたつぷり舐めてくれたおかげで、私の指はふやけてしまいそうにとろとろだ。敏感な秘唇を挟みこむように、

布地の真ん中あたりを、まあるく円を描くように擦る。

くち、くち、と粘つくいやらしい音と一緒に、お姉ちゃんの顔がびくつと震える。

「それとも——こんなふうに擦るのがイイのかなっ♪」

「っ、あ、や、やだ、っ、やめて……、お願いっ！ こいし、駄目、……姉妹で、こんな、ことしちゃ……っ」

「えー？ お姉ちゃんが悪いんだよ？ こんなにいやらしい顔してさ。……我慢できなくなっちゃうよ。ねえ？」

構わずに、ぐい、と指先を深く立てこもうとした時、

「や……っあ!!」

お姉ちゃんが急に暴れ出した。

その反応と、『おんなのこ』の入り口付近の、硬く強張った窮屈な感覚に、私はそのことを確信した。

「ふうん……まだ、ナカに挿れたこととか、ないんだ？」

「っ……!!」

図らずも、お姉ちゃん自身が、文字通り身をもって、そのことを証明してしまっていた。

「ふふ。誰か本当に好きな人のために、『はじめて』はとっておいてあげるの？ 可愛いなあ、お姉ちゃんって」

「っ……や、やめて、こいし、も、もう、本当に………おんなの、止めに……っ」

「いいなあ。お姉ちゃんの最初の相手の人って、きつと幸せだ



よ？　こんなに熱くてとろとろで、ぬるぬるで——ほら、わかる？　入口だけでもきゅうって締め付けてくる。お姉ちゃんのナカ、すっごくキモチいいんだろなあ」

下着の布地を引っ張り、滑り込ませた指先で、お姉ちゃんの狭い入口の、浅いところを擦る。ちようどそこがお姉ちゃんの一番感じるところみたいだった。

「ひあ……っ!？」

指の先がほんの少し入ったくらいで、お姉ちゃんは懸命に抗おうとする。はじめてを失ってしまう事を嫌がっているようにも、単に辛いようにも見えた。

「これくらいで痛がつてちゃダメだよ。さっきも言ったじゃない？　男の人のつて、もつと全然おつきいんだよ？　硬くて、

熱くて、火傷するみたいで——おなかの奥まで、無理矢理づぶつて入ってくるんだから——」

言いながら、少しずつ手の動きを速めてゆく。押し込まれた指にお姉ちゃんの柔らかい膜がにゅるにゅると絡み付き、小さな入口にはぷくりと蜜の珠が浮かぶ。

『おとこのこ』がどんな感触なのか、お姉ちゃんははつきりとイメージできているだろうか。さつきから感度を増したお姉ちゃんの第三の眼が執拗に私の心を読もうとしている。

「それでね？　にゅぶつ、つておなかの奥まで貫かれて、息ができなくなるくらい、ココの奥がおちんちんでいっぱいにされ

ちゃうの。それから、何度も何度も奥まで思いつき搔き回されて——苦しいのに、どんどん、おなかの奥が熱くなって、切なくなってくるんだよ？」

「つあ、だ、だめ……やめ、て……え」

もうたぶん、お姉ちゃんの頭の中は、自分の想像と私の心の中も区別がつかないくらいにぐちゃぐちゃになっていることだろう。だから、ありもしない私の体験まで勝手に作りだして、想起しているに違いない。

それはいったいどんな光景なんだろう。お姉ちゃんの想起の中で、私はどんないやらしい目に遭わされてるんだだろうか。

古ぼけた小屋に閉じ込められ、おちんちんを啜えさせられて、無理やり組み敷かれているのだろうか。素敵な恋人に、ベッドの上で優しく抱きしめられているのだろうか。血が出るのも構わず、殴られて、悲鳴を上げながら、何人にも代わる代わる犯されているんだろうか。

——お姉ちゃん、私のことを、そんな風に見<sup>想起して</sup>ているんだろ  
うか。

「つあ、あ、や、やだ、やだあつ、……!!　こいし、やめてっ、お願いっ……!!」

私の指に反応して、おねえちゃんが乱れてゆく。声を甘く跳ねさせ、あそこをとろとろと濡らして、ぎゅつと目を閉じて。胸が、鏝で擦られるみたいに不快だった。

ざりざりと音を立てて、心が削られる。

私はここにいるのに。

私の心はここにあるのに。馬鹿なお姉ちゃんは一切、どこを見てるんだろう。

椅子の上に追い詰めたお姉ちゃんの身体に、腰を寄せて。私はこくりと口の中の唾を飲み込んで、指を速める。

下着の上からでも、『おんなのこ』の中心からこぼりと噴き出す熱く粘りけのある感覚がはつきりとわかった。くるんと円を描くようになぞる指先がいやらしい蜜に湿り、縦に細く食い込んだ布地が、柔らかな粘膜に擦られて、くち、くち、といやらしい音を響かせる。

お姉ちゃん必死に声が漏れないように口元を押さえていた。

「あはっ♪ ほら、お姉ちゃん、すっごい顔してるよ？ おクチまでこんなに汚しちゃって……鏡、持ってきてあげようか？」

「んっ……あ……っく……う」

あのお姉ちゃんがこんなふうに乱れてるなんて。いつも人の心を見透かして、泰然としているお姉ちゃんが。こんなに可愛いしぐさを見せるなんて。なんだかとても新鮮だった。

なんだかたまらない気分になって、私はおねえちゃんの下着の股布を掴んでぐいっとなぐり上げる。

途端、お姉ちゃんはぎゅっと私の手を掴んだ。かくかくと唇を震わせて、首を左右に振る。

「や、だめ……っ！ そ、それ、だめ……こすれ、てッ」

「ふうん？ これ、好き？ ねえお姉ちゃん、こうされるの好きなの？」

「あ、あああああ、あっ!?」

自分がしている時と同じように、緩急をつけて布地を押し上げる。細くお姉ちゃんの脚の付け根に食い込んだ股布に、じわあつ、とまるで漏らしみたい甘い染みが広がってゆく。お姉ちゃんはぎゅっと目をつぶって、赤く染まった頬を震わせた。貼り付いた下着の布越しに、はつきりといやらしいカタチを浮かび上がらせているお姉ちゃんの『おんなのこ』に、ひっかくようにして指を折り曲げ、食い込んだ布地の隙間を擦る。

「ひあ……っ!?」

お姉ちゃんの甘い声が、一オクターブ高く跳ね上がった。

「ね。お姉ちゃんのココ、すっごくとろとろになってる。ぱんつの上からでも指、はいっちゃいそうだよ？」

普段のつましやかさも忘れて、お姉ちゃんの『そこ』は、食い込ませた下着の布皺を咀嚼するように、いやらしく蠢いていた。濡れ透けた下着の布地が、細い脚の付け根にできた隙間に、にちゅりといやらしい蜜の糸を引く。

「……もつと、触ってあげるね」

「——だ、だめ、こいし……っ」

我慢できなくなつて、私はお姉ちゃんの下着のウェストのゴ

ムを引つ張り、そこに手を滑り込ませた。

「ふあああっ!？」

直接触れたお姉ちゃんの『おんなのこ』は、指がとけそうになるくらい、熱くてところどころになっていた。ばんつの上から蜜でぬるぬるのべとべとになった指が、案外すんなりとおねえちゃんの女の子の芯のなかへと沈んでゆく。

同時に、狭いお姉ちゃんの孔の奥から、ぷちゅ、と蜜が塊になつてあふれ落ちた。

「うわ……」

おねえちゃんが声を堪えようと口を押さえた。きゅ、きゅ、とリズムカルにいやらしく指を締め付ける。

「んゅ……や……だ、め、っ」

「うふふ。お姉ちゃん、まかせて?」

「や、やめ、てっ……」

細かく動かしした指先で、お姉ちゃんの——まだ、誰も触れたことのないトコロを探つてゆく。

入口の狭い場所のすぐ奥のあたりに、重なった柔らかいひだひだがあった。ところどころになった粘膜をそつと掻き分けるように擦ると、お姉ちゃんは『んうっ』とぐもつた声を上げ、面白いくらいに背中を反らせる。刺激が強すぎるのか、弄られる度にお姉ちゃんは腰を引かせてしまうけれど、私はそれを押さえつけて（お姉ちゃんは力もないのだ）逃がさない。

「だめ、そ、そこ、だめ、変になつちやう……っ!! そ、そんな、キモチいい所ばっかりっ……!」

椅子の上、がくがくと腰を震わせるお姉ちゃんの、ピンと伸びた爪先が、宙を大きく跳ね上がる。もう限界、を示すその合図にも、私は構わずに、お姉ちゃんの狭いナカをこね回した。お姉ちゃんのナカが、きゅうつと締まるのに合わせて、おへソの側のところを軽くひつかくように、ゆつくりと指を引き抜くと——

「ああああああああ……ッ!!」

がくがくと、上半身を強く仰け反らせて。お姉ちゃんが頂に達する。

ぎゅつとしがみつく様に袖から覗く手が私の腕を掴み、太腿がきゅつと閉じ合わせられる。熱くぬかるむ布地に押し付けられた手のひらに、じわあつと熱い飛沫が飛び散るのが分かった。

私も軽く肩を上下させながら、得も言われぬ達成感にしばし恍惚となり——

—— [close] ↑ [open] ——

(……あれ?)

くてり、と力なくソファの上に横たわる、お姉ちゃんの様子を見て、私は唐突に我に返った。

……いや待て。

まずは落ち着いて深呼吸。事態の確認を試みよう。

「……………」

すうはあと息を整えれば、はつきりと感じるえつちな匂い。

椅子の上のお姉ちゃんは、半脱ぎのスカート、濡れた下着、ほんのり紅らんだ頬。緩んだ口元から、とろりと涎の後。霞む眼は焦点も合わないままこちらを見上げて、快楽の余韻に潤んでいる。

ふと眼をやれば、執拗にお姉ちゃんのを弄り回していた指は、まるでふやけるようにとろとろに熱く濡れている。

うん。どうみても事後です。ありがとうございました。

（やっちゃった——!?!）

動揺とともに、大量の冷や汗が噴き出して頬から顎を伝ってゆく。背中にもじわりと気持ち悪い感覚がぬるりと浮かび、凄まじい居心地の悪さが襲ってきた。

ちよつと、からかうだけのつもりだったのに。

……どうしてこうなった。

（いやー。あはは。……うーん。無意識って怖いなー）

なんとなく誤魔化してみる。いや、その、自分でした事ではあるんだけど。ここまでするのはちよつとなんというか、姉妹

としてもちよつと引くわというか。

（……マジでなにやってんだろ、わたし）

お姉ちゃんのこととはまあ、時々うつつというしいとは思うけど、基本的には好きで、……まあどっちゃかっていうといじめたくなるような感じでの好きなんだけど、だからと言ってたった二人の姉妹なんだから、大事に思っていないなんてことはなくて。

でも、その感情はあくまでその、健全な家族愛みたいなものであったはずで。決して、こーゆうことしたいってわけじゃ……でも、あれ？ つい無意識のうちに……無意識でこーなっただってことは……

「……………えつと」

なんだか色々まずい気がしたので、私はそそくさとソファを離れ、踵を返した。

訳もなく胸が高鳴り、ほっぺたが熱い。

とりあえず、最初の目的だった『お姉ちゃんのお説教をうやむやにしてごまかす』つてのは達成された以上、長居は無用だ。

少し本格的に——ほとぼりを冷ました方がいいかも。

そう思い、放り投げていた帽子と靴を掴んで、早足でドアをくぐろうとした時——

「こいし」

耳元で聞こえた声に、口から心臓が飛び出しそうになった。「っ、お、おねえちゃんっ!?!」

たつたいままで、そこで半分失神してくてりと転がっていたはずのお姉ちゃん、私のすぐ背後に立っていた。

乱れた胸元も露わに、すっかり上気した表情。息も荒く、目も快感にとろんと蕩け、焦点を失ったみたいに澱んでいる。

「待ちなさい」

「っ……!?」

後ろから、予想外の力でぎゅうっと抱きしめられて。私は恥ずかしい事に思い切り声を上げてしまっていた。

でも、おかしい。無意識は私の十八番のはずなのに——その私がお姉ちゃんのこと気付けないなんて。よく考えると異常事態だ。いったい、何が起きて——

「え、と、お、おねえちゃん……?」

ぎゅうっと背中から抱きすくめられているので、その顔を窺う事も出来ない。お姉ちゃんの荒い息が首筋に掛かる。

ついさつき、乱れたばかりのお姉ちゃんの身体は、いつもよりもずっと暖かくて、淫靡な匂いを漂わせていた。

一瞬だけ、くらりと頭が揺れた気がする。

怒られる? 叱られる? 混乱する頭の中で、お姉ちゃんは私の耳元に唇を近づけ、

「まだ、駄目よ」

同時に。

足の爪先から頭のとっぺんまでを貫くような猛烈な衝撃が、

私を貫いていた。

「——ッ、……!?」

頭の奥が痺れ、火花が飛び散るように明滅する。

息ができなかった。胸の奥が弾けるみたいに、猛烈な勢いで鼓動が高鳴る。

「御免なさい。でも——もう、抑えられないの」

もう一度——お姉ちゃんの指が、私の胸の閉じた第三の目に触れていた。

「こいし」

言葉とともに。私の閉じた瞼の上から、お姉ちゃんの第三の眼が、まるでキスをするかのように重ねられる。

こっん、と。

瞼の上に触れると、同時に——

「——ッッ!?」

あまりにも、あまりにも容赦のない、圧倒的な意識が、流れ込んでくる。

好き、好き、だいき、愛してる。何万回繰り返しても全然足りない、ありったけの『大好き』が、私の心へ流れ込み、閉じた眼の奥を侵食してゆく。

こっんと触れ合う心の中に、

「——ッ、あ、ッ——ッ——ッ——ッ!!」

お姉ちゃんの告白は。

私の悲鳴でかき消されて、聞こえなかった。

真っ白な衝撃が、脈打つ胎動が、まるで怒涛のように私の中へ押し寄せてくる。息が詰まりそうな——いや、魚が水の外で濃すぎる酸素に喘ぐような——もうずっと前に忘れていた感覚。

覚には日常であつて、けれど私にはそうでなくなっていた日常。自分の中に押し入ってくる『誰かの心』

すっかり枯れ果てていた私の心の中に、お姉ちゃんの意識が流れ込んでくる。

「ふ……あ……ッ」

熱く滾る感情の奔流に、私のちっぽけな心はあつという間に埋め尽くされ、腰が抜け、かくんと膝が折れて。私は近くにあったソファアの上に倒れ込んでしまう。

とさり。私の手から帽子が抜け落ちて、ころころとソファアの向こうに転がってゆく。

天井を向いた私の上に覆い被さるようにして。ぞつとするほど妖艶な笑顔を覗かせて、お姉ちゃんが微笑んだ。

「……こいし。……もつと、見せて?」

「いや、ちょ、お姉ちゃんっ!? そ、それはちよつとまづくはないかなあ!! いやほら、色々、そのね?」

一気に立場逆転。ソファアの上を後ずさるうとした私は、あ

つという間に端っこに追い詰められていた。

そして容赦なく、また第三の眼が触れ合わされる。

「だ、だめ……ッ、——お、ねえ、ちゃっ……!!」

ベッドの上で、私はどうすることもできずに、身体を跳ねさせていた。舌がもつれ、手足の力が抜け、視界までぼんやりと歪む。

すき、すき、だいすき。あいしてる。

ずつとずつと、長い間閉じていた心の中に、お姉ちゃんの熱い熱い情動が、溢れんばかりに注ぎ込まれる。

「こいし……」

「んっ、あ、あつ、おねえちゃ、やめ……っ」

逃げようともがく私の身体を、お姉ちゃんはしっかりと押さえて離さない。ぐうつと体重を預けるように、お姉ちゃんの暖かい身体が、私の自由を奪っていた。

さつきはあんなに軽かったお姉ちゃんの身体を、どうしてもか跳ね除けることができなかった。その間にも私の心の中には、途方もないお姉ちゃんの意識が注ぎ込まれる。

息をするのも勿体ないというくらいに、お姉ちゃんのキスは終わらなかった。

(っ、ま、だめ、……見、見られ、て、っ……)

これ以上、心を繋げらていたらだめ。それだけは確かだった。私はとつさに、胸の眼を手のひらで覆い隠そうとする。

「だ、め……そ、それ、だめ、……私、が、わたしじゃ、なくなっちゃう……っ」

途切れ途切れの息を継ぎながら、そうやって必死に紡いだ拒絶の言葉は、

熱に潤んだお姉ちゃんの唇にふさがれた。

「っ……んう……っ！」

「こいし、好きよ。……大好き」

ちゅ、ちゅと触れあった唇の粘膜から、お姉ちゃんの『すきすきだいすき』が流れ込んでくる。

「……ん、ふ、……ちゅ……んう……っ」

「んっ、う、……っ……っ……っ!!」

濡れて湿った唇が深く重なり、甘く跳ねるお姉ちゃんの声に、頭が痺れて弾けて震える。

顎を押さえられ、首の後ろにするりとお姉ちゃんの手が伸びる。口の中を舌がまさぐり、絡みついてくる。

お姉ちゃんの舌は小さいけれどとても熱くて、口の中を掻き回されるたび、びりびりと電流のようなものが弾けるみたいだった。優しく舌を吸われ、唇を甘く噛まれて、手足からどんだん力が抜けて、抵抗も雪みたいに消えてゆく。

「お、ねえ、ちゃ……」

「ん……っ」

息苦しくて逃げようとした息継ぎのその瞬間を狙って、お姉

ちゃんは思い切り私の口を吸った。じゅるる、とはしたない音を響かせてしまい、私は顔が赤くなるのを感じる。

「っ……だめ、おねえ、ちゃ、……見ちゃ、だめ……っ」

ぎゅう、とソファーに爪を立てて、私は声を上げていた。

能力の制御が利かなかった。激しく高鳴る胸の鼓動に、閉じていた瞼が小さく震え、その隙間を広げてゆく。お姉ちゃんの指が優しくそこを撫で、解きほぐすように柔らかに擦り——瞼をそっと押し開いてゆく。

ぞくりと背中を這い登る感覚に、私は背中をのけぞらせた。

ダメ。……それは、だめ。

（覗かれちゃう……!! おねえちゃんに、わたしの心のなか、全部覗かれちゃう……っ）

恥ずかしいことも、気持ちいいことも、隠しておきたい事も全部、全部。

私が閉じた眼と一緒に、<sup>サトリ</sup>覚の能力と一緒に、無意識の中に封じていた、気持ちまで。

「あ………ッ」

抵抗する私を蕩かすように、お姉ちゃんは私の第三の眼を舐め、優しく吸って、瞼の隙間に指を差し込んでくる。

薄く広がった瞼の隙間から、ちりつと脈打つ瞳の奥に、お姉ちゃんの意識が、覗えた。

— [close] ↑ [open] —

ソファアの上。お姉ちゃんに押し掛かれたまま。真つ赤になつた顔を覆つて、私は子供みたいに泣き出していた。

ぜんぶ、ぜんぶ、見られてしまった。

内緒にしていたことも。見たくないと思つていたことも。

私の秘密は、全部、お姉ちゃんに見られてしまった。

「や……っ、ば、馬鹿っ、おねえちゃんの、馬鹿っ……見ちゃ、

だめって、いった、のにつ……」

いつから、だつただろう。

お姉ちゃんの心が読めるのが、怖くなつてしまったのは。

「やだつて、言つたのにつ、……お姉ちゃんの馬鹿あ……っ！

……こんなの、お姉ちゃんにつ、見せたくなんか、なかった

のに、っ……!!」

閉ざした眼と一緒に、私は自分の気持ちまで、心の底に埋め

てしまったのだ。

「……大丈夫よ」

しゃくりあげる私を励ますように、お姉ちゃんがそつと頭を撫でてくれる。ふわあ、と胸が熱くなる。わけもなく涙があふれて止まらない。

お姉ちゃんの心が読めないから。

次に何をされるのか分からない。そのドキドキが切ないくらいに胸を締め付ける。

「怖がらないでいいのよ」

そう言つて、お姉ちゃんは私の、胸の眼に口づけた。

「……んツツ……!!」

お姉ちゃんの舌にほぐされるように、わたしの閉じた眼の瞼が、少しずつ、少しずつ押し広げられてゆく。

「ここは、わたしたち覚の一番大切なところなの」

多くの思考を読み取る眼——なによりも敏感に、心に繋がる場所。心理を読みとる無防備な第三の眼。サードアイ

「だから、ここで感じたことは、本当のことよ」

そこを指で刺激され、舌でそつと舐められ、柔らかく弄られてほぐれる。薄く瞼を開いた第三の眼はどんどん感度を増し、わたしにもお姉ちゃんの心が視えるようになっていた。

「……こいし」

「……おねえちゃん……っ」

——『やめて』『怖いよ』『好き好きおねえちゃん』。自分でも解らなかつた沢山の感情が、堰を切つたように溢れ出して、止まらなかつた。

もつと。もつと。胸の奥がきゅうつと切なく締めつけられて、たまらずに服の裾を握り締める。



許容量を超えた感情に、わたしがギブアップをしようとしたその時。不意にお姉ちゃんの気配が遠のいて、離れてゆく。

ぼんやりと目を開いた私の視界に、お姉ちゃんの顔が映る。するりと私のスカートがおなかのところまで捲られていた。

「え」

呆けたような声が、思わず漏れ、

「~~~~ツツ!!」

ぼん、と頭が蒸気を噴いて沸騰する。

そこがどうなっているのか、私自身も薄々分かっていただけ。

丸見えになった下着の合わせ目は、前も後ろも大きく染みを広げ、誤魔化しようがないくらいたつぷり濡れていた。

「つ……や……あ」

そうだ。無意識の中で忘れていたけれど。

お姉ちゃんの事なんて、ぜんぜん馬鹿に出来ないくらい。わたしだって、恥ずかしいくらいびしょびしょに、下着を濡らしていた。

「こいし。……こも、見せてくれる？」

名前を呼ばれると、すぐに。

お姉ちゃんの舌が、そこに触れた。汚いよ、という声が飛び出しかけて、すぐに消える。

男の子と、経験豊富だ——なんて、そんな設定を思い出したわけじゃなくて。

単に、キモチ良すぎて声が出なかった。

下着の上からあつという間にべちゃべちゃに舐められ、その形が布地越しにも分かるくらいに透けてゆく。

「~~~~ツツ!!」

混乱と恥ずかしさで、何もできなかっただけ。

「つは……ふ、……ちゅ……れるっ……あむっ……」

思わず臉を閉じれば、そこは暗闇。私ひとりとそれ以外しか区別のつかない世界。そこでは、目の前にいるのが、私のよく知っているお姉ちゃんなのということまで、わからなくなってしまう。

だから私は顔を覆った手の指の間から、お姉ちゃんが私の恥ずかしいところを舐め続けるのをじっと見ているしかなかった。  
「……………つ、ふ。……つ、あ」

必死に、喘ぎ声が出そうになるのだけは堪えて。息継ぎだけを繰り返す。お姉ちゃんが口のまわりをべとべとにして、いやらしい蜜を嚙り、こくと飲みこんで、私の恥ずかしいところを、一生懸命舐めている。

「んう、ちゅ……る、じゅる……るうっつ」

「つ、あ、つ……!!」

さら、と紫の髪がお姉ちゃんのおでこを流れる。

小さな口を一生懸命に開いて、舌先が布地にしわを寄せ、上から下へと、股布を喰い込ませた溝を押し開けるように動く。

焦らすように上から下へ、急きたてるように下から上へ。

にち、にちと粘ついた音の正体は、けれどお姉ちゃんの唾液だけじゃなく、わたしのそこが口を開いていやらしく溢れさせたものだ。

つう、と唾液と私のいやらしい蜜が混じった糸を引いて、伸びる。

「ふぁ……ッ!」

お姉ちゃんはそつと口をすぼめて、割れ目の上にある、一番敏感なところに吸いついた。ちゅう、といやらしい音を響かせて吸われるたび、敏感な突起が引っぱり出されるみたいに布地に擦り付けられて、腰が勝手に跳ね上がる。

喉からせり上がる声は、抑えることはできなかった。語尾は甘く蕩け、

「おねえちゃ……、っ」

頭の中まで一緒にぐちゃぐちゃにかき混ぜられたみたい。

なにもわからないまま、かすれた声で私は『それ』を望んでいた。

「こいし……いい?」

慈しむように、優しい声音で囁かれて。お姉ちゃんは私の下着の股のところを咥えると、そのまま引き下ろしてゆく。

私を見上げるように細められたお姉ちゃんの視線が。赤く染まった表情が、訳もなく、私を興奮させる。手を使わずに、唇

だけで下着を脱がされるのは、お姉ちゃんを隷属させているみたいで、なんだか物凄くぞくぞくした。

ぐいと下ろされた下着に、白っぽく泡立った粘り気のある糸が何本も引いてゆく。甘ったるい香りが溢れ、ソファーに蜜の染みがこぼれて落ちる。

そして——ついに露わになった私の『おんなのこ』が、外の空気に晒された。

何も身につけていない、私のいちばん大事なところを、隅から隅まで、じっくり見られて。こぼりと、熱く滾ったものが溢れる感覚まではつきりわかるくらい。

自分で弄ってみたどんな時よりも、敏感になっているのがわかった。

「おねえちゃん……」

膝を大きく広げられ、何も身につけていない下半身にすうすうと風を感じる。わけもなく泣きそうになりながら、私はお姉ちゃんに叫ぶ。

「……やめ、ないでっ」

顔じゅうを、涙とよだれでどろどろにして。

「やめちゃ、やだ……っ」

私は、そう叫んでいた。

『ん』と。

小さく頷いたお姉ちゃんが、そこに唇を寄せてゆく。桜色の

小さな唇も、私のそこ同様、とろとろといやらしく濡れていた。

ちろりと、かるく舌先が触れただけで、膨大な感情が流れ込んでくる。繋がったままの第三の眼は、敏感になった身体の触れ合いをきっかけにお姉ちゃんと私の間に直列回路を築いてしまったらしい。

とろとろの舌がそこを押し広げ、舐めてゆく。

「っあ、ああ、あうあ、あ、あっ」

いやらしく蠢くわたしの『おんなのこ』が、お姉ちゃんの素敵なキスでとろけてゆく。ひとりりでしている時とはぜんぜん違つて、『そこ』は自分でも信じられないくらいいやらしくカタチを変えていた。

思わず掴んでしまったお姉ちゃんの頭が、こくんと小さく揺れて、熱い舌先はさらに情熱的に吸いついてくる。

「うあ、や、おねえちや、あっあ、あッ……」

おねえちゃんに、恥ずかしいところを全部見られて、広げられて、吸われて、舐められて。

とんでもなく恥ずかしいことをしているのに、胸の高鳴りが止まらない。厭だつて気持ちはどうだん薄れて、代わりに際限なく膨らんでゆく、もつとして欲しいという気持ち。

「あ、あっあ、あ、あう、く、あっ……」

「……ふふ」

ねろり、と私のナカから舌を引き抜いて、お姉ちゃんは、く

すりと微笑んだ。

「良かった。……こいしはちゃんと、『女の子』なのね」

「……そ、んなの、最初からっ……わかった、くせにつ……お姉ちゃんの、馬鹿っ……」

つまらない嘘まで、見抜かれて。もう、私に取り繕うものなんて残ってなかった。情けないくらいに顔を赤くして、私は喉の奥で動物みたいに唸るだけだ。

「こいし、辛かったら、言つてね」

私のほつべたに、首筋に、たくさんたくさんキスをして、お姉ちゃんは指まで使つて、本格的に私のそこをいじめ始めた。

お姉ちゃんの指先が、やさしくそこをかき回す。やわらかい内側の粘膜を傷つけないように細心の注意を払いながら、浅くゆつくりと、けれど執拗に。入り口のところをなんども擦られて、じんじんと痺れが腰に伝播し、私の『おんなのこ』はとろんと口を開け、ぷくりと蜜の塊を溢れさせる。お姉ちゃんはそれを指先で掬い、周りのお肉に塗りつけてゆく。

じんじん痺れるみたいに脚の付け根が熱くなり、指で押し開かれた狭い入口が、その奥のひだひだを覗かせてしまう。

ぱく、と小さな口を開けたお姉ちゃんが、快感の中に包皮へもぐりこんでしまった突起に吸いついた。にゅるにゅると唾液の混じった粘液を吸い上げ、突起がちゅるんと吸い出される。

「——ッ!!」

空気に触れるだけで頭に電流が走るそこを、直接唇に吸い上げられて、わたしは悲鳴を上げてしまった。

脚の付け根がとろけて、ぐちゃぐちゃにぬかるんでいくみたい。息が詰まりそうになり、私は必死に髪を振りみだし、首を振り立てた。

「っ、や、だめ、そのため、それ、しちゃだめ……っ!!」

「……駄目よ」

掠れたお姉ちゃんの声が、ぞくりと背中を震わせた。

ぬふり。あつさりとお姉ちゃんの指を、『はじめて』の奥へ迎え入れて。私は恥ずかしいくらいはしたなく、お姉ちゃんの指を締めつけてしまう。

「っあ……はあ、う、つくっ」

「大丈夫よ。……傷ついたりしてないから」

ナニが大丈夫なのか全然わからなかった。お姉ちゃんの指は私の奥までゆつくりと出入りして、狭く曲がりくねった道のナカをこね回し、おへソの側にぶくりと膨らんだ、コリコリとした場所を押し上げる。

瞬間。ずんっ、と視界が揺らぎ、頭のでっぺんまでを突き上げられたみたいな衝撃が立て続けに私を貫いていた。「っは、ッ、あ、ふ、ひああああっ」

私の『おんなのこ』がきゅんきゅんと疼いて、お姉ちゃんの指をきつく締め付ける。はつきりと爪のカタチまで分かるくら

いに狭くなった私の臍内を、お姉ちゃんは激しく指を前後させた。お姉ちゃんの細い指に、体全部を揺さぶられているみたい。

「ん、……ここも、ね」

そうして、ぶくりとむき出しになった突起に、お姉ちゃんの唇が、舌先が、思い切り吸いついてくる。

小さな突起の根元から先端までを、じつくりと、時間をかけてなぞり上げられる。びりびりと、直接そこに甘い電流を流しこまれているみたい。だらしなく伸びた爪先が、ぴんと跳ねてソファアの上を搔き筆る。自分で握り締めた胸上の第三の眼の閉じた瞼を、私は知らず、左右の指で何度も擦っていた。

「っああああああああっ!!」

背中を走り抜けた快感が、何度も何度も腰の上で爆発する。頭が真っ白になり、ろれつの回らない舌と口元が緩む。そんな中に、突起をそっと指の背中で押し上げられ、私はついに背中をのけぞらせた。

腰が震え、背骨を貫く様に熱い衝撃が走りぬける。きゅうと足の付け根が震えて、熱い飛沫が噴き上がる。

ソファアの上にはばちやばちやと降り注ぐ透明な潮を、お姉ちゃんほうつとりと見上げていた。

「あ……や、おねえちゃん……っ」

——ごめんなさい。

粗相をしてしまったお姉ちゃんに、謝罪の言葉が飛び出して

いた。

訳もなく涙が溢れてくる。お姉ちゃんはくすりと、言葉にできないくらい妖艶に微笑んで、そおと私を見た。

そして、

「……………んっ」

ほとんど間も置かずに、お姉ちゃんはまた同じところを舐め始めた。たったいま絶頂に昇り詰めて、敏感になったそこに、指を食いこませ、ゆつくりと押し込んで、その倍くらいの時間をかけてゆつくりと引きぬいてゆく。にちゅ、といやらしく蜜を引いた指は、たちまち私のナカへ深く這入りこむ。

「っ、や、あ、ああ」

お姉ちゃんのそれは、本当に、ほんとうに長く長く、しつこく続いた。どれだけ私が泣き喚いたって、やめてくれない。私のキモチいいと思うところを、一番感じてしまう場所を、的確すぎるくらいの確に探り当てて、くち、くちと一定のペースを守りながら、何度も何度も掻き回す。

私がなんとか声を上げて果ててしまっても、お姉ちゃんは構わずに指を動かし続けた。快感のうねりは果ても無く高まり、熱い塊がおなかの中にせり上がって、逃げ場をなくして、ぱあんと弾けそうになる。

「っや、ま、また、また、っ……………!!」

たちまち腰を跳ねさせて昇り詰める私に、お姉ちゃんは全然

手を緩めてくれなかった。細い指は、私のナカのひだひだの、粘膜を掻き分けて、容赦なく、弱いトコロだけを徹底的に擦りあげる。さっき『はじめて』を覚えたばかりの私のそこは、すっかり馴染んだ様子で、いやらしくにゅぷにゅぷと音を立て、お姉ちゃんの指を根元まで咥えこんでいた。

「や、だ、っ…………お、おねえちゃ、ん、っ、やめ、も、もう、そこ、キモチ良く、しないでっ…………」

私の『おんなのこ』の部分が、どんどんお姉ちゃんを覚えさせられてゆく。声を絞り上げるように、お姉ちゃんに叫ぶ。

「も、もう、何度も、イってるっ、からあっ……………!!」

「駄目よ」

なんども絶頂に突き上げられる中、だらしな顔で懸命に叫んでも。熱に浮かされたような顔で、お姉ちゃんはきつぱりと首を振った。

「こいし。貴方と、もっど、したいの」

…………ごめんなさい。お姉ちゃんを甘く見てました。

心を読まれながら、こんなにねちっこく、しつこく責め続けられたら、ぜったい誰にも叶わない。一度達して敏感になった場所を、精確に見つけ出して何度も何度もこね回す。

お姉ちゃんは一人でしてる時もこんななんだろう。だとしたらいったい、一度にどれくらい続けるんだろう。

あたまでどこか顔も、涙とよだれでどろどろ。

「っふ、ふーっ、ふううっ」

必死にソファーに噛みついて息を使用するのも、もう限界だった。ソファーの布地はわたしの垂れこぼした唾液でべとべと。堪えようとしても勝手に声がでて、腰が跳ねる。

「っああああ!!」

果てもなく押し寄せる快感のうねりは、途切れる気配すらなかった。

「お、ねえ、ちや、っ、あ、へ、んに、なっちやう、あたま、おかしく、なっちやうっ!!……わ、わたし、こ、こんなの、知らないっ、こんなキモチいいの、知らない、よおっ……!!」

お姉ちゃんの魔法みたいな指に、舌に、私はまた、身体をのけぞらせて甘い悲鳴を上げていた。

—— [close] = [open] ——

「っ、はーっ、はーっ、はあーっ……」

延々、ひたすらに——いつ終わるとも分からないくらい、徹底的に虐められて。私は声を上げる暇も無く、大きく肩を浮かせ、息をついていた。

身体もほとんど言うことを聞かない。何度も絶頂に突き上げ

られて、伸びきった手足は鉛のように重い。

一体何度、恥ずかしくもはしたなくも潮を噴きまくってしまったのか。

ソファーの上はびちゃびちゃ湿っていた。自分自身とおねえちゃんの、良く似た甘いおんなのこの匂いが混じり合って、息をするだけでも胸がきゅんきゅんと疼く。

疲れ切った身体とは対照的に、私の恥ずかしいところはさらに敏感に、甘く疼いて、いやらしい蜜をぶくりと浮かせていた。

「こいし」

ぎし、とソファーが揺れる。

小さく囁いて、お姉ちゃんはスカートのホックをはずし、ブラウスとカーディガンの袖から手を抜く。キャミソールをするりと脱ぎ下ろすと、そこにはもう何年もまともに見たことのない、生まれたままのお姉ちゃんの姿があった。

無駄な肉のない、細い手足。折れそうな腰。薄いけれど、けれどほんのりと先端を色づかせた胸。常日頃、表に出ることなく過ごす色の薄い肌は、ほんのりと紅く色づいていた。

「綺麗……」

思わずそんな言葉が口をついていた。

たぶん、私とそう変わらない、華奢なスタイル。

「こいしも、可愛いわ」

伸ばされた指先が、私の上着のボタンを外してゆく。

ブラウスも同じように左右にはだけ、あらわになった私の下着に——つけたばかりのブラのフロントホックが、ぱちんと外される。

私の気にしているぶにぶにおなかも、形の悪い左足の薬指も、お姉ちゃんは気にしなかった。

汗ばんだお姉ちゃんの身体が、ぺたりと肌に寄せられる。まるで、私達は生まれた時からそうなっていたみたいに、ぴたりくっついて、触れ合った肌がキモチ良かった。

胸先がにゅるっと擦れ合い、尖った先端が擦れる度に胸の奥が、おなかの奥がきゅんきゅんと疼いてたまらない。

こんなに、恥ずかしいのに。

どうしてだろう、やっぱりおねえちゃんは、わたしのおねえちゃんなのだと、はつきり分かつてしまう。

そして。

さらに、とお姉ちゃんの前髪が、私のおでこにかかる。

「んっ……」

これまでのどんなキスよりも、濃厚で素敵なキス。お姉ちゃんの味がする。唾液よりもっと濃いと濃い、お姉ちゃんの味。

それが美味しくて、たまらずににゅるにゅると舌を絡めてしまった。

その瞬間に頭の奥に電流が走る。じいんとココロの奥が疼いて、痺れるように震える。

私は息をするのも忘れて、お姉ちゃんの唇を吸っていた。

「ん、ん。ふっ、う……」

今日覚えたばかりの舌を使つて、お姉ちゃんの唇を甘く噛み、舌を絡ませあつて、蕩けるような味にこくりと喉を鳴らす。

触れ合う唇から唾液が溢れ、つうと顎を伝つてゆく。

重なる唇から触れ合う粘膜から、まるで第三の眼みたいにお姉ちゃんの感情が流れ込んでくる。

キスの意味なんて、私は今日まで知らなかった。

身体の中でも、特に敏感で、無防備なところを触れ合わせるつてことは、それだけ相手のことを信頼していきやできないことだ。

こんなにも簡単に、人の心を知る方法が、あったなんて。

「おねえちゃん……もつと……もつと、キス、して」

混じり合った感情が溶け合い、互いの心の区別ができなくなる。溶け合う遺伝子の交わりのうねりの中に、私はみるみる飲み込まれてゆく。

——恋が、大好きな人とひとつになりたい、という想いだとするなら。

私達は、本当にそれができるんだ。

そう思うと、与えられているだけなのが、たまらなく切なくなつて。私はお姉ちゃんの身体に手を伸ばしていた。

瞳をふれ合わせ、指先をお姉ちゃんの足の隙間に。さつき触

つていた時よりも、もつといやらしく、甘く蕩けて。火傷しそ  
うに熱いぬかるみに、ぬるりと指先が沈み込んでいく。

「んう……っ♪」

切なげに眉を寄せ、お姉ちゃんが声を漏らす。

浅く入っただけの人差し指が、まるでねぶられるみたいに熱  
くなぞりあげられ、きゅ、きゅ、と間断的に締め付けてくる。

それが、お姉ちゃんの感じている身体のリズムなのだとわかっ  
た時、とてつもなく愛しさが込み上げてきた。

「おねえちゃん……すごい……」

お姉ちゃんのナカは、とつても狭くてきついのにみつちりと  
柔らかいお肉が詰まっっていて、寄せ合わされたひだひだがうね  
うねと蠢いていた。ほんの少し指先を押し込んだだけなのに、  
まるで唇に吸われているみたいに、ちゅうつと指が奥へ引き込  
まれてゆく。

狭いひだひだの中から引き出すように指を動かすと、柔らか  
なナカがぞるるつと情熱的に絡みついてくる。お姉ちゃんはぶ  
るぶると震えて声を上げた。

お姉ちゃんの『おんなのこ』に、私は簡単にイカされてしま  
った。男の子がこれをされたら、絶対に5回もまたないはずだ。

「にゆるにゆるして……ゆび、とけちやいそう……」

「こいし……」

もつと。もつと。お姉ちゃんがキモチ良くなれるように。懸

命に、お姉ちゃんの心を読もうと——胸の眼を強く、強く意識  
する。

細い管で繋がった私の第三の眼が、ほんの少しだけ開いて。

そして——私は。それまではまるで感じなかった、お姉ちゃ  
んとは別の思考の波を感じとっていた。

「……え……？」

とくんとくんと高鳴る鼓動が、強く震える。首筋の後ろあた  
りにちりつと痺れるような痛み。

すぐ近く。この部屋の入口のドアの陰から、息を潜めてこち  
らを覗いている、ふたつの意識の波。

どっちも私のよく知っているペット達のものだった。

「……へ、あ？」

とろんと蕩けた頭では、その意味がしばらく、分からなかつ  
た。ぼやけた視界を巡らせると、薄く開け放たれたドアの向こ  
うから、しつかりとはみ出す黒い羽根に二本の尻尾。

『、——』

お燐とお空——流れ込んでくる、二人の思考に——頭が真っ  
白になる。

(み、見られ、て……っ!?)

顔から血の気が引いた。



間違いない。お姉ちゃんのペット——いつもお姉ちゃんのそばで、お姉ちゃんを支えている二人。その二人が、じつと、猛烈に昂った熱く滾る思考を、私に向けている。

「っ、お、おねえ、ちやつ……」

しがみつくように、お姉ちゃんの顔を見上げる。足が震えて、ろれつも上手く回らない。

「い、いま、お隣たちが、そこ、み、見られっ……」

「あら。……今頃気付いたの？」

さっきまでのお返しとばかり。お姉ちゃんは意地悪な笑顔で、くすつと微笑んだ。完全な不意打ちに私の思考は空転する。

え、だって。だって——

「ずつと前から見られていたわ。……こいしがあんなにいつぱい、可愛い声を出しているんだから、起こしちゃうのも仕方がないかしらね」

「っ……!？」

なにそれこわい。

……え？　ってことは、お姉ちゃん、全部気付いてて、それでもずつと、あんなに、えつちなことを？　……ひよつとして、これまでも、独りでしてる時も、ずつと？

困惑する私の、第三の眼をそつと撫でて。その刺激にびくつと身体を竦ませてしまうのを見て、お姉ちゃんは、とても妖艶に、微笑んでいた。

「いいのよ。……ふふ。あの子達にもいつぱい見せてあげましょうね。こいしの可愛いところも、素敵な啼き声も、ぜんぶ」

「……え、えつと……ふあ!？」

いきなり頬にキスをされ、悲鳴を上げてしまった私の胸に、またちりちりつと焦げるような感覚がある。

「ほら……解るでしょう？」

お姉ちゃんにたつぷり舐められて、すっかり柔らかくなった胸の脇が、そつと指で広げられる。

同時に、館じゅうのペット達の思考が、一気になだれ込んできた。

お隣にお空だけじゃない。たくさん——普通の妖怪よりも優れた聴覚、視覚、嗅覚を持つ、たくさん——のペット達は、それぞれの方法で私達のことを『視て』いた。

見たくなくても見てしまうのは、あの子達だって同じだった。お姉ちゃんと私の熱気に当てられたように、皆の思考は昂り、滾り、波打つうねりのように私の心に流れ込んでくる。

「……………つつ」

思っていたの、何倍の、何十倍の、何百倍の——感情が。私を飲み込んでゆく。

前もそうだったはずなのに、一度覚<sup>サトル</sup>で在ることを止めてしまった私は、それを処理しきれない。オーバーフローしそうなった頭を振り乱し、周りを見回せば——

「つ……っふ、にや……あ」

「んう、うにゆう……っ」

ドアの陰。とうとう我慢の限界を超えたらしきお空とお燐が、絡み合うように熱いキスを始めていた。

「……………っ」

もう慣れた様子で、二人はお互いのスカートの中に手を入れて、指を動かしている。二人の思考はもう私達には向けられておらず、目の前の、大好きな相手を愛しいと思う感情でいっぱいだった。

見慣れた二人の、見たことも無い姿に、火が出そうなくらい顔が熱くなる。

「……………」

「はあ。……自分たちの部屋まで我慢できないのかしらね」

お姉ちゃんは余裕の表情でそんなことまで言ってくる。

「さ。……こいし？」

「……………っ」

もう何が何だか分からない。お姉ちゃんに促されるまま、私はお姉ちゃんを受け入れていた。

「ふあ……!!」

お姉ちゃんは私の足首を掴んで広げ、その内腿に、膝がしらに、ふくらはぎに、順番にキスをしてゆく。

さらに靴下を脱がされて、足の指まで順番に。これからもつ

とキモチいいことをされる——その、予告みたいなもの。

くすぐったさと、期待と興奮がないまぜになって。身体の奥がきゅうんと疼く。

「おねえちゃんっ……!!」

ソファアーの上、膝立ちになって私を見下ろすお姉ちゃんに。

私は小さく首を縦に動かす。それで、お姉ちゃんは私の返事をしっかり、聞きとってくれた。

「っ……」

もうこれ以上、心が離れてしまうのが嫌で。私の知らないお姉ちゃんを見たくなくて。私は夢中になつてぎゅ、とお姉ちゃんの手を掴む。

「おねえちゃんの顔、見えないの、やだ」

「……………そうね」

くす、と微笑んだお姉ちゃんは、わたしの片足を持ち上げ、互いに脚を交差させるようにそこを跨いだ。

ぷに、と触れ合った下腹が、ぴったりとくっついて、にゅるにゅると触れ合う『おんなのこ』が甘く擦れる。

「こいし」

「——おねえちゃん」

声を上げると同時に。

お姉ちゃんが一気に腰を押し付けてきた。くちゅり、と蕩けてひとつになるように、重なり合った大切な場所から、頭の芯

を融かすような甘い痺れが流れ込む。

『おんなのこ』同士のキスに、全身を歓喜が貫いた。

「つあ、あああああああ」

きゅうと触れ合う内腿が震え、お姉ちゃんに唇を塞がれる。

は、は、と途切れ途切れの息がこぼれ、お姉ちゃんの頬を伝う汗がぼたりと触れる。

きゅううつと、身体を擦り付ける。ここに二つの身体があるのともどかしいくらいだった。お姉ちゃんの感じていることは全部わかる。お姉ちゃんだって、私の感じていることは全部分かっているはずだ。

だから、ここに二つの身体はいらない。一つに溶け合って、混じり合って。そうすれば、もともとは素敵なことになるのだと、そう分かった。

私は夢中になって、腰を動かした。けれど快感をむさぼる身体は私の意思すら無視して跳ね上がり、甘く疼いて止まらない。

「あ、こ、こし、勝手に、うごい、ちゃ」

自分が波のように分解されて、お姉ちゃんの波長と混じり合いい、どこまでもどこまでひとつに重なる。

「だ、だ、め、ま、た……っ」

「っ……」

きゅううと手を伸ばし広げて、お姉ちゃんに、来て、と催促する。

「おねえ、ちゃんも、いつしよ、で、なきや、やだっ」

ほとんど余裕もないくせに、そんな事を叫んでしまう。

ん、と領いて、お姉ちゃんは深く身体を倒し、腰の動きを速めて来た。

ぱちゅぱちゅと水つばい音を響かせてぶつかり合う。擦れる度にせり上がってくる快感のうねりを必死に堪えて、お姉ちゃんの胸を舐める。

「——、こいし、っ」

思い切り、ソファアの上に押し付けられるように——お姉ちゃんが体重を乗せて覆いかぶさってくる。柔らかい体、胸が触れあい、ふにふにと形を変えてくつつく。

キスと同時に、私の身体から脈打つ蜜が思い切り吹き上がって、お姉ちゃんと重なり合った場所へ進む。

お姉ちゃんの滾りを受け止めながら、同時に私も達していた。同時に緩んだ私の眼から、お姉ちゃんの感じている全てが流れ込んでくる。胸に、足の付け根に、髪に、腕に、お尻に、手に、唇に、心に。

お姉ちゃんのキモチいいが、だいすぎが、私の胸の中に飛び込んで膨れあがり、果てのなくなるまでとろけて混じり合う。

さいしよ、お姉ちゃんが何度も駄目だと言っていたのは、きつとこれだ。

私も、お姉ちゃんも、どこまでが自分なのか分からない——

うねり揺らめく波の中に、私達を繋ぐ遺伝子の鎖が溶け合い、混じり合い、ひとつのものになってゆく。姉妹として生まれ、別々に生きた私達が、同じ場所へと還る。

突き抜けた絶頂は、なんどもなんども叩き付けられ、少しも収まる気配がない。腰をくねらせ、足を絡めて、『おんなのこ』をくつつけて。私は全身でお姉ちゃんを感じ取った。

「も、もう、無理……っ、お、お願い、もうだめ、わたし、もうだめえ……っ」

必死に絞りだした懇願に、けれどお姉ちゃんは首を振って、ちゅうと私の胸を吸った。それだけで私はあられもなく声を上げて身体を仰け反らせ、ソファアの上に腰を跳ねさせてしまう。恥ずかしくて死にそうで、止めたいのに止められない。

「嫌よ」

上ずった声で。お姉ちゃんは私を組み敷いて、真っ直ぐに見下ろしてくる。

「こんなふうにできるのなんて、今夜だけかもしれないもの」  
違う、と叫びたかった。

でも、でも。気持ち良すぎて、喘ぎ声以外の声が出ない。

頭が真っ白になって、私はなんどもなんども声を上げ、腰を跳ねさせてしまう。

指と指とを交互に絡め、それを胸の前で握り締めて。

「っ、い、ああ、あつ……っ、っ」

だらしなく声を上げる私を、ソファアの上に押し付けて、お姉ちゃんは何度もなんども、腰を擦りつけてくる。

体よりも先に、頭がおかしくなっちゃう気が、した。

お姉ちゃんの事以外、お姉ちゃんが大好きってこと以外、なにも考えられない。お姉ちゃんの『大好き』を徹底的に覚え込まされた身体は、どんな風に弄られても、あられもなく乱れてみつともなく痙攣する。

きゅんと疼いた下腹部の奥から、こぼりと白く濁った蜜の塊がソファアの上に零れおち、またお姉ちゃんの指を、舌を求めていやらしく蠢く。お姉ちゃんに弄り回されたその形を覚え込まされて、それ以外の何も受け入れられなくなってしまう。

私の心の下に埋まっていた恋の火は、余すところなく暴かれて、ありとあらゆるお姉ちゃんとの感情が想起されてゆく。

私とお姉ちゃんは、たった二人きりの姉妹で。

なによりもお互いの事を知っている、さとり妖怪だ。

だから叫ぶ。嘘にならないように、今だけは本当の気持ちで。

「おねえちや、っ、すき、……だいきき、だいきき……っ!!」

それに答えて、こいし、こいしと繰り返される私の名前。まるで恋しい、恋しいと響いているみたいだった。

(了)

## 【あとがき】

はじめまして、あるいはお久しぶりです。

折葉坂三番地の銅おりはと申します。

このたびはお手に取っていただきありがとうございます。

この本、『コメイジコミュニケーション』はさとり様とこいしちゃんの禁断の姉妹愛について書いた、当サークル二冊目の18禁SS本となります。懲りもせずまたやってみました。

こいさとさとりこのリバ有りという構成な上、いろいろ独自解釈等が見られますが、ややこしいことは抜きにしてふたりのちゅつちゅを堪能して頂ければ幸いです。

今回も白身氏、Ryua氏には様々な形でお世話になりました。

また、表紙アイコンには「三丁目だつたころ」の村人。様作成のアイコンを使わせていただきました。快く許可を頂きありがとうございます。

この場を借りてお礼をさせて頂きます。

—— それでは。

また次の機会にお会いできることを願つて。

## ◆表紙アイコン

「三丁目だつたころ」 (<http://murabito.sakura.ne.jp/scm/>)

村人。様

## 【奥付】

「コメイジコミュニケーション」

平成23年8月13日 C880

発行 折葉坂三番地 (<http://onhazakablog28.fc2.com/>)

著者 銅おりは

※本作は「上海アリス幻楽団」様の「東方Project」の二次創作です。





ヤマアラシってどうやってえっちするの？

*"How do Porcupines mate?"*



東方project Fanbook 2011.8.13  
発行:折葉坂三番地

とっても慎重にするのよ。

*"Very carefully."*

